

原 著

## 横浜市における新生児聴覚スクリーニング施行動向

高橋 優 宏<sup>1)</sup>, 持松 いづみ<sup>2)</sup>, 平原 史 樹<sup>3)</sup>, 折館 伸 彦<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 横浜市立大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学,

<sup>2)</sup> 横浜市総合リハビリテーションセンター 耳鼻咽喉科,

<sup>3)</sup> 横浜市立大学医学部 産婦人科

**要 旨:** 先天性難聴の早期発見・早期療育が良好な言語発達をもたらすことと自動聴性脳幹反応検査 (automated auditory brainstem response : AABR) や耳音響放射 (otoacoustic emissions : OAE) 検査の出現により, 本邦では2001年より新生児聴覚スクリーニングが開始された. 2007年助成廃止後, 実施数は増加傾向ではあるが, 横浜市における新生児聴覚スクリーニングの現状を把握するべく療育機関在籍児の施行動向を調査した. 2013年度における実施率は約70%と推定され, 現在もなおスクリーニング経ず難聴の発見が遅れ言語発達に影響を及ぼしている児童がみられる. 新生児聴覚スクリーニング実施率のさらなる増加のために公費負担の実現が望まれる.

**Key words:** 新生児聴覚スクリーニング (new born hearing screening),  
先天性難聴 (congenital deafness), 自動性聴性脳幹反応 (AABR), 耳音響放射 (OAE)